

長禅寺 服部家の石碑

西羽 晃

桑高の南に諸戸徳成邸がありますが、その南に長禅寺があり、高台にあるので、桑名の市街地からもよく見えています。この寺は長島の下坂手にありましたが、明治の木曾三川改修工事のため、現在地へ移転してきたのです。私宅のすぐ近くであり、境内をしばしば通り抜けています。境内の一番目立つところに、この寺の檀家である服部家の立派な墓があり、その横に石碑が立っているのは知っていましたが、今まで読んだこともなかったです。最近になって碑文を読み取って、驚きました。墓も石碑も大正8（1919）年に立てられており、石碑には服部家のいわれが書いてあります。

漢字ばかりの文ですが、要約しますと、先祖の服部伊賀守源宗純の子孫である服部武次二郎源義康は、津島4人衆の一人であり、男の子が4人おり、長男孝康、次男尚康、3男惟康は津島一統の3大将と言われる武士でした。惟康は織田信忠に仕えて、本能寺の変の時に、京都二条城で討死しています。4男の道康は長島・松之木村に住み、その村の長となりました。



長禅寺にある服部家石碑

文禄元（1592）年豊臣秀吉が朝鮮半島を攻めた時に、各地で軍船を建造しましたが、下坂手でも大船を作り阿太希（安宅）丸、伊勢丸と称しました。下坂手で大船を作った残材で、碁盤と仏卓と梯子を作り、下坂手の聞光寺と仁了寺に現存している。

以上が石碑の文面ですが、明治18（1855）年ころ発行の『桑名郡志』では「阿

宝丸」と称しており、建造の時に使った梯子が仁了寺に残っていると書いてあり、昭和 49（1974）年発行の『長島町誌』では西川村の大樟で阿宝丸を作り、その竣工式が仁了寺で行われました。竣工式に使った徳利、仏前卓 1 脚、軍船建造に使った梯子の残片が仁了寺に残っていると書いてあります。それぞれニュアンスは違いますが、仁了寺には何か残っていそうです。

まず聞光寺に問い合わせましたら、そのような話は伝えられていないし、物も残っていませんとのこと。仁了寺に電話を試みましたが、「この電話は現在使われていません」と音声での応答です。寺の近くの人に訊ねてみましたが、先年住職が亡くなり、後を継ぐ人がいないので無住になって、たまに関係者の方が見廻りに来られる様子とのこと。

手がかりが掴めないで、私は手紙を出してみました。返信用の切手を貼った封筒を同封したが、一向に返事が来ないので、状況がつかめていない現状です。どなたか仁了寺の様子をご存じの方はおられませんか。

なお、岐阜県中津川市福岡の常盤神社境内には秀吉の朝鮮出兵の船を作るために切られたと伝えられる切株が今も残っています。この木材が木曾川を筏で流されて来て、下坂手で陸揚げされて造船されたものかも知れません。